

特集

熊本大学大学院生命科学研究所 微生物学分野教授就任のご挨拶



大学院生命科学研究所
微生物学分野教授
澤 智裕

平成二十六年九月一日付けで熊本大学大学院生命科学研究所微生物学分野教授に就任致しました澤智裕と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は、平成三年に鹿児島大学工学部を卒業し、平成八年に京都大学で博士（工学）の学位を取得いたしました。同年、本学医学部微生物学教室に助手として赴任後、平成二十五年に東北大学へ異動まで微生物学・感染症学の教育・研究に從事してまいりました。この間、平成十三年に文部省在外研究員として米国立衛生研究所ヒト発がん部門、ならびに平成十四〜十七年にはWHO国際がん研究機関（フランス・リヨン）にて科学官として勤務いたしました。この度、再び熊本大学で研究・教育に従事する機会を与えていただきましたことをこころより感謝申し上げます。

本学微生物学教室は、熊本大学医学部

の前身である私立熊本医学校が医学専門学校に認可された直後の一九〇七年（明治四十年）に開設されました。中島秀一初代教授の就任以来、太田原豊一第二代教授（熊本県立医科大学）、六反田藤吉第三代教授（国立熊本大学医学部）、日沼頼夫第四代教授（国立熊本大学医学部）、前田浩第五代教授（国立大学法人に移行）、赤池孝章第六代教授（熊本大学大学院生命科学研究所微生物学分野、現東北大学）により、これまで当教室から、我が国は言うに及ばず、世界の感染症学をリードする数多くの研究者と教育者を輩出してきました。

現在、衛生環境の整備や抗菌治療、ワクチンの開発などにより多くの感染症のコントロールが可能となってきました。しかしながら、一部の開発途上国などの地域では未だ感染症が死因の上位を占めており、また先進国においてもエボラ出血熱の脅威が記憶に新しいように、新興・再興感染症、高齢化による日和見感染症、薬剤耐性菌の蔓延など感染症を取り巻く新たな問題が起きつつあるのが現状です。医学教育では、微生物学・感染症学の基礎的な知見の修得とともに、このような感染症動向のアップデートに対応できるグローバルな人材の育成に取組むべく学生の指導にあたりたいと考えています。

北里柴三郎博士が当時多くの研究者たちが不可能と考えていた破傷風菌の純粹培養に成功したのがいまから一二六年前の一八八九年でした。北里博士は誰もが考えなかつた破傷風菌の嫌気性という発想に至り、それを証明するために自ら「亀の子シャーレ」を考案して破傷風菌の純粹培養という画期的な成果を上げました。私達教室員一同も、これまでの常識にとらわれず、観察と実験に基づいた自由な発想から微生物学、感染症学の研究に取り組んでまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

熊本大学大学院生命科学研究所 部歯科口腔外科学分野教授就 任のご挨拶



大学院生命科学研究所
歯科口腔外科学分野教授
中山 秀樹

平成二十七年一月一日より歯科口腔外科学教室の教授に就任致しました。私は平成八年に九州大学歯学部を卒業後、九州大学第二口腔外科に入局し、研修医を経て同教室の大学院に進学後、口腔癌に関する基礎的研究で学位を取得しました。学位取得後は、九州大学病院に勤務後、

平成十五年に福岡県の飯塚病院歯科口腔外科に一年間勤務しました。飯塚病院では顎顔面骨骨折など外傷患者に対する治療を多く行いました。熊本大学へは平成十六年に赴任し、前任の篠原正徳教授のもとで一〇年間、臨床・研究・教育に従事しました。篠原教授の指導のもと口腔外科全般の手術を習得し、特に口腔癌の治療に精通しております。

現在当科では、歯科が約二割、口腔外科が約八割の比率で診療を行っています。歯科診療は、主に入院患者の治療や特殊な背景を有する外来患者の歯科治療などです。一方、メインの『口腔外科』の診療は多岐にわたります。具体的には、顎顔面骨骨折や歯の破折・脱臼、そして口腔軟組織損傷などの外傷性疾患、顎骨の異常発達により咬合異常を呈する顎変形症、歯性疾患に起因する顎顔面領域の炎症、顎骨に生じる嚢胞・腫瘍、シエーグレン症候群や口内炎などの口腔粘膜疾患、三叉神経痛や神経麻痺などの神経性疾患、唾石症などの唾液腺疾患、顎関節症や顎関節腫瘍などの顎関節疾患、口腔悪性腫瘍などが挙げられます。上記の通り多様な疾患の治療に当たっておりますが、当科入院患者の約八〇％は口腔癌患者です。

さて、熊本県全域における口腔外科の医療ネットワーク体制に目を向けますと、口腔外科の拠点病院は熊本市に集中して